【 38 】

氏　　名	Szymon Grzelak（シモン グジェラック）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	文　博　第 320 号
学位授与の日付	平成 17 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	文学研究科文献文化学専攻
学位論文題目	The Linguistic Category of Degree in Japanese and Polish: A Contrastive Study （日本語とポーランド語における「程度」という言語的範疇の対照研究）
論文調査委員	（主査）教授 佐藤昭裕　教授 田窪行則　教授 田口紀子

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は日本語，ポーランド語，英語を対象に，「程度」（degree）という意味範疇に関連する様々な言語事象について分析することを目的とする。具体的には，1）対義的な形容詞「長い—短い」とそこから派生した「長さ—短さ」という名詞のペア，および対応する英語，ポーランド語の表現について，2）程度副詞「とても」と対応する英語，ポーランド語の副詞による形容詞，動詞の修飾について，3）「数量」と「程度」という二つの言語範疇の関係について，意味論的な分析を行うとともに，個別言語の形態的・統語的・語彙的特徴による相違を明らかにすることを目指すものである。

第一の問題については，これまでヨーロッパの言語，とくに英語を中心に研究されてきたが，論者は日本語を中心に据え，それにポーランド語，英語の分析を加えた対照研究を目指す。第二，第三の点については，従来程度表現としての観点からの研究はなされてこなかったが，論者はこれらを程度表現として捉えることにより，程度に関連する様々な表現の総合的研究を目指す。全体は六つの章からなり，その中心は二章から五章の議論である。それぞれで以下のような議論が行われる。

第一章では，本論文の目的，分析の範囲，方法論が示される。はじめに本論文における議論に現れる「程度」という概念の定義付けを行い，この意味的な範疇が内外の研究でどのように扱われてきたかを総括する。従来「程度」という範疇は，たとえば「長い—短い」といった対義的ペアを持つ形容詞等の述語に典型的に現れ，「プラス」と「マイナス」の極性を持つスケール上に位置するものとされてきた。「長い」は「プラス」の極性，「短い」は「マイナス」の極性を持つものとして，ともに「長さ」という一つのスケール上に位置している。この対立のプラスの極性を持つメンバーとマイナスの極性を持つメンバーは，対等の分布を持つ訳ではない。派生名詞について見れば，プラスの表現は対立の無標の項として，スケールそのものの名称を表すことができるのに対し（例えば「長さ」），マイナスの表現（「短さ」）は有標の項として，その分布，使用可能な文脈は著しく制限されている。このような事実を出発点として，後続の分析が行われることが示される。さらに，形容詞に関連する問題に加え，従来は必ずしも程度表現としては捉えられて来なかった動詞の事象構造の問題，名詞の概算表現の問題についても，程度表現として捉えることができるということが主張される。

第二章では，マイナスの極性を示す形容詞（「長い」に対する「短い」）の有標性がその分布にどのような影響を及ぼすか，また形容詞が名詞化されることによって（「短い」から「短さ」へ）分布がどのような変わるかを分析する。まず最初にコーパス・データに基づき，形容詞の極性と名詞化の意味論的・語用論的な効果について考察を行う。ここで分析の対象とするのは1）数値によって限定された数量表現，2）比較表現，3）比率・割合表現，4）順位表現，5）程度を問う疑問文の五種類である。インフォーマントからの情報，各種コーパス資料，インターネット上の検索システムから得られるデータを分析した結果，マイナスの程度表現は日本語，英語，ポーランド語のいずれにおいても有標であり，限られた分布を示すことが確認された。これは程度という，スケール性を持つ意味範疇の持つ，言語普遍的な性質によるものである。同時に，日本語の派生名詞に着目すると，語彙的な制約がなく，実際の使用を見ても，「短さ」「低さ」といったマイナスの項から作られた派生名詞の使用範囲がかなり広く，ポーランド語や英語におけるのとは異なり容認度が高いことが分かった。例えば，

日本語では広告の文面にもよく見えるように，適切な文脈，状況を与えてやれば，「3ミリの薄さ」「2センチという短さ」「(最新のパソコンは）薄さ19.8ミリ」といった数量表現との共起，「世界で二番目の小ささ」といった順位表現や「どれくらいの低さ」といった疑問表現での使用が可能になるが，ポーランド語や英語ではマイナス程度を表す派生名詞のこのような使用は不可能である。これは日本語の構造上の特徴と考えられる。そして，このような表現の使用，容認可能性について，接辞「さ」を用いた名詞の派生についての語彙的な制約が少ないことに加え，「の」もしくは「という」といった補文標識が使用されるという形で，その意味的・統語的な特性が関係してくること，さらに程度表現の一部において日本語では名詞が形容詞より一般的に優先されることが重要な要素となると考えられる。一方，ポーランド語に固有の形態・統語的現象としては，例えば比率・割合表現でマイナスの極性を持つ形容詞が用いられる現象（dwa razy krótszy「?（AはBより）2倍短い」，o jedną trzecią lżejszy「?（AはBより）1/3軽い」）が挙げられる。このような表現は，日本語では全く不可能とは言えないものの解釈が困難であるが，ポーランド語ではごく自然な表現として使われる。以上のような事実から，程度表現を通言語的に研究する際，意味的な有標性・無標性の対立に関連する言語普遍的な特性と同時に，個別言語における形態・統語・語彙構造による制約の両方を考慮に入れる必要があると結論付ける。

第三章では前章で述べた現象を実験的な観点から解明することが試みられる。マイナスの項の形容詞および派生名詞を用いた表現は，適切な文脈がない場合には不自然と感じられることも多く，許容の判断もインフォーマントの間でばらつきが見られる。そのため，意味論上のモデルで予測した主張を裏付けるためにより大きなサンプルを対象にした調査を行う必要がある。ここでは，日本語及びポーランド語の母語話者を対象に三種類のアンケート調査を行う。一つは日本語の話者を対象に，予めマイナスの項の派生名詞を含んだ文を提示し，その許容度の判定を求める調査である。第二章の議論の基礎となったマイナスの項の派生名詞を含む例文を用いて調査を行ったところ，全て平均若しくは平均以上の評価を受けることが確認された。第二の調査は，同じく日本語の話者を対象に，それぞれの状況において当該の意味を表すために最も適切と思われる表現を被験者自らに書いて貰う穴埋め式のテストである。この能動的なテストと最初の受動的な評価テストの結果が対称性を示さない点が興味深い。すなわち，この第二のテストでは，その場で話者が判断をくだす能動的使用においては，マイナスの項の派生名詞が受け入れやすいと予測される文脈でも，被験者はかなりの度合いでプラスの項の表現を使用すること，結果としてプラスの項の表現とマイナスの項の表現が同じ程度に選ばれることが分かったのである。最後に，第三の調査では，ポーランド語話者が比率・割合表現においてマイナスとプラスの項の形容詞をどのように許容するかを調べた。その結果は前章で行った議論を支持するものであり，従来程度の意味論を扱う文献でしばしば主張されてきたのとは異なり，ポーランド語の比率・割合表現ではマイナスの項の形容詞がプラスの項と全く同等に用いられることを実証するものとなった。

第四章では，日本語「トテモ」とポーランド語 bardzo という程度副詞について考察を行い，程度修飾語の対照的分析の可能性について論じた。従来のアプローチは程度修飾を受ける述語を意味的に分類することを専らとし，修飾可能な表現を含む意味的なクラスの列挙に終始してきた。しかし，この方法による記述は現象面の記述に留まり，それぞれのクラスについての明確な説明を行うものではなかった。この章では，「トテモ」のような程度修飾語との結合によって修飾を受ける表現，述語が本来程度表現であるという事実に注目し，それらの持つ性質に当てはまるスケールの特性・種類を明らかにすることが重要であることを示して，日本語とポーランド語における段階性を示す表現をこの観点から分類することを試みた。具体的に分析の対象となるのは，形容詞と動詞である。とくに動詞については，そのアスペクト的な意味と述語のスケール性の関係に注目し，ポーランド語のどのような動詞がどのような条件の元で程度副詞 bardzo による修飾を受けられるかを論じる。そして，完了体動詞とともに使用される場合には非文となるが（*Dziecko bardzo *krzyknęło*.「*子供はとても叫んだ」），同じ動詞を不完了体に変えると正しい文になる（Dziecko bardzo *krzyczy*.「*子供はとても叫んでいる」）と言った観察が示される。最後に，程度副詞 bardzo の比較級での使用，及び疑問文での使用が分析される。比較級の総合的な形式を持つ形容詞語彙に対して，副詞 bardzo の比較級 bardziej を用いた分析的な比較級の形式を使うと，比較の基準となる対象も，その性質について高い程度を持つことが前提となるという興味深い観察が示される。両者の違いは日本語では「より」の二重の使用によって示される。例えば，Taro jest *wyższy* niż Jiro.（「太郎の方が次郎より背が高い＝実は二人とも背が低くても構わない」（総合的形式の使用），Taro jest *bardziej wysoki* niż Jiro.「太郎の方が次郎より，より背が高い＝

次郎の方も背が高いことが前提となる」（分析的形式の使用）といった興味深い用法の指摘も行われる。また，日本語の「トテモ」はそれによって修飾された語彙の語彙的な特性の高い度合いを示す強調詞としての役割を果たすのみであるのに対し，bardzo の場合は疑問文の中で使用されると中和が起こり，前提なしで純粋に程度を問うために使用される（jak bardzo？「どれくらい？」）といったことが指摘される。

第五章では「程度」と「数」の相互関係について論じる。そして，可算名詞によって示される離散的な対象であっても，かなり大きい量，あるいは予測困難な量になると，日本語では程度として概念化されることを主張する。すなわち，日本語の「クライ」「ホド」「ダケ」といった，本来程度を表す表現に由来する副詞が概算的数量を示すことに注目し，これらの副詞を他の概算を表す表現（「およそ」「約」「前後」等）と比較しつつ分析する。そして，疑問文が，要求する答の正確さの度合いによって三段階の階層をなすことを主張する。「明日のパーティーは何人来ますか？」「明日のパーティーは何人くらい来ますか？」「明日のパーティーはどれくらい（の人が）来ますか？」の順で正確な答えを要求する度合いが下がっていく。もっとも概算的な「明日のパーティーはどれくらい（の人が）来ますか」という表現は，可算的な個体，すなわち個人を一種の集合体として扱う形式であり，ポーランド語や英語と比較して日本語に特有の現象であると考えられる。さらに，このような疑問文に現れる概算性の示し方が言語ごとに異なることを主張する。例えば，英語の How many people will come？には日本語の「くらい」のような概算を表す語は現れていない。一見すると，構文として正確な数を問うているように見える。しかし，実際には文字通りの意味で正確な答えを要求しているわけではない。それに対して日本語では「何人くらい来ますか」というように，概算的であることを明示する必要がある。逆に，正確な答えを求める時，英語では exactly のような明示的表現が必要になるが，日本語ではこの概算を表す「くらい」を外すことで同じ効果が得られることになる。数量表現におけるこのような「ぼかし言葉」の使用は知識・情報的な要素以外に敬語のような語用論的な要因に強く依存するものであり，日本語では，数量表現に限らず，他の疑問表現にも広く（例えば「どこ？」に対する「どの辺？」，「いつ？」に対する「いつ頃？」）見られる現象である。

以上本論文は，日本語，ポーランド語，英語を対照し，従来必ずしも程度表現として捉えられてはこなかったものを含め，種々の構造，程度表現について考察した。そして，程度表現の通言語的な研究に際して，スケール上のプラスの項とマイナスの項，意味的な有標性—無標性の対立に関わる言語普遍的な特性（意味に関わる問題）と，それぞれの言語の形態的，統語的，語彙的制約にもとづく個別性を区別する必要があること，限られた言語を用いた意味的な分析によって，言語の普遍的性質を述べることには慎重であるべきことを実証した

論文審査の結果の要旨

本論文は，「程度」という意味範疇が自然言語でどのように実現するかという問題について，日本語，ポーランド語，英語の対照を通して論じたものである。程度表現は従来英語を中心にヨーロッパの言語を対象に分析されてきたが，日本語についてはなお十分に研究されているとは言えない。また他の言語との対照研究も殆ど存在していない。本論文は，「長い—短い」といった対義的ペアをなす形容詞だけでなく，動詞や名詞も分析の対象とし，様々な文法範疇を通じて現れる程度表現の全体的な研究を目指すものである。六つの章からなり，その中心は二章から五章の議論である。論者の主張は次の三点に要約することができる

1．「長い—短い」といった形容詞のペアは，スケール上にあってプラスの項（「長い」）とマイナスの項（「短い」）の対立として捉えることができるが，このような形容詞のペアと，そこから派生した名詞について見ると，プラスの項とマイナスの項で分布が異なることが観察される。プラスの項は無標の形式として，前提なしで程度を問う疑問文に使用され，あるいは名詞化されてスケール全体の名称となる。一方，マイナスの項は有標であり，限られた分布を示す。論者はこのことを日本語，ポーランド語，英語について明示的に示し，程度という意味範疇に関する言語普遍的な性質として位置づける。その上で論者は，個別言語の特徴にも注意すべきことを主張し，1）程度表現と数量表現の共起，2）比較構造，3）比率・割合の表現，4）順位表現，5）程度を問う疑問文，といった具体的構造の記述を通して，マイナスの項の生起に対する制約の言語ごとの違いを明らかにしていく。例えば，日本語では「小ささ」「低さ」「薄さ」といったマイナスの項の派生名詞の使用範囲が，他の言語に比べてかなり広いこと，あるいはポーランド語では，従来英語等の観察をもとに普遍的とされてき

た見方に反し，「何倍」「何分の一」といった比率・割合表現がマイナスの項の形容詞と自然に結合することといった事実である。このような指摘は，従来の限られた言語を中心とした議論に基づく普遍性の主張に対する反証として説得的である。またその際，単に意味的なカテゴリーの議論に終始するのではなく，個別言語の形態や統語構造といった形式面の違いに注意しつつ論を進める論者の態度も評価すべきである。

2．形容詞，動詞を修飾する程度副詞「とても」と，対応するポーランド語の副詞 bardzo について，どのような種類の述語を修飾するかという観点から分析し，当該の述語が程度表現でなければならないことを明らかにした。そして，単に，修飾される述語の語彙的な意味による分類を示すのでなく，それらが示す性質に当てはまるスケールの特性，種類を明らかにする必要があることを主張した。従来程度表現と結びつけて論じられなかった形式について，述語のスケール性という観点から分析する論者の主張は新鮮である。またこの議論の中で，例えばポーランド語の動詞アスペクトと副詞 bardzo の使用の関係について，あるいは形容詞比較級の用法について等，興味深い事実を示すことに成功している。

3．「程度」と「数」の相互関係について日本語の「クライ」「ホド」「ダケ」といった本来程度を表すと考えられる副詞が概数を示すこと，「どれくらい（の人が）来ますか？」といった表現において，可算的な個体が一種の集合体として扱われ，量としてスケール性を持つことに注目し，このような表現が英語やポーランド語に対する日本語独自の現象であることを主張する。さらに，このような「ぼかし」表現の使用が敬意表現にも通じる語用論的問題であることを示している。

以上の議論を通して，論者は，程度表現を通言語的に研究する際，スケール上のプラスの項とマイナスの項，意味的な有標性—無標性の対立に関わる言語普遍的な特性と，それぞれの言語の形態的，統語的，語彙的制約にもとづく個別性を峻別し，限られたデータにもとづいて言語の普遍的性質を論じる危うさを見事に示している。論者の提示する新鮮な例文もこの論文の魅力を増すものである。

このように本論文は，理論面の考察と巧みに選ばれた例文によって刺激と発見に満ちたものであるが，一方で，論者が指摘した言語ごとの違いがなぜ生じたのかという点については，必ずしもすべて十分な説明がなされている訳ではない。しかし，その解明は今後の課題であり，全体として本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上，審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2005年2月18日，調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果，合格と認めた。